



鶏肉

◆飼養動向

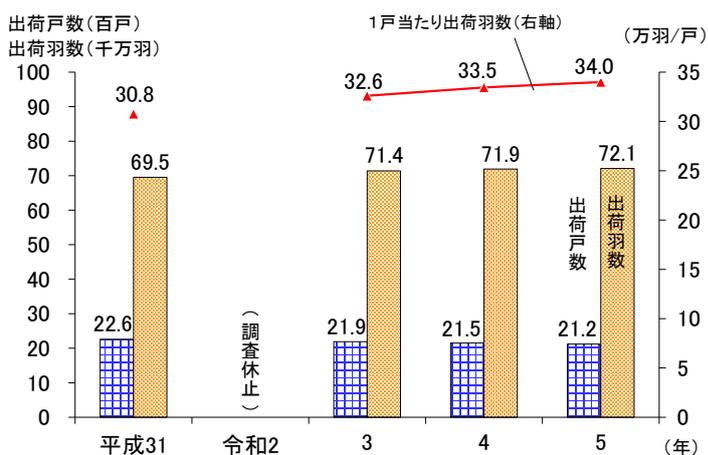
5年2月現在の出荷羽数は前年比0.2%増

ブロイラーの飼養動向は、小規模農家の減少や大規模層（年間出荷羽数50万羽以上）のシェアの拡大を背景に、出荷戸数は減少傾向で推移する一方で、1戸当たりの平均飼養羽数や平均出荷羽数は年々増加傾向にある。

令和5年のブロイラーの出荷戸数は2120戸（前年比1.4%減）と前年をわずかに下回った（図1）。また、出荷羽数は7億2087万8000羽（同0.2%増）と前年並みとなった。この結果、1戸当たりの出荷羽数は34万羽（同1.6%増）と前年をわずかに上回った（図1）。

なお、ブロイラーの出荷戸数および出荷羽数を規模別に見ると、ブロイラーの出荷羽数が50万羽以上の層が、出荷羽数全体の49%を、出荷戸数全体の13%をそれぞれ占めた。

図1 ブロイラー出荷戸数および出荷羽数の推移



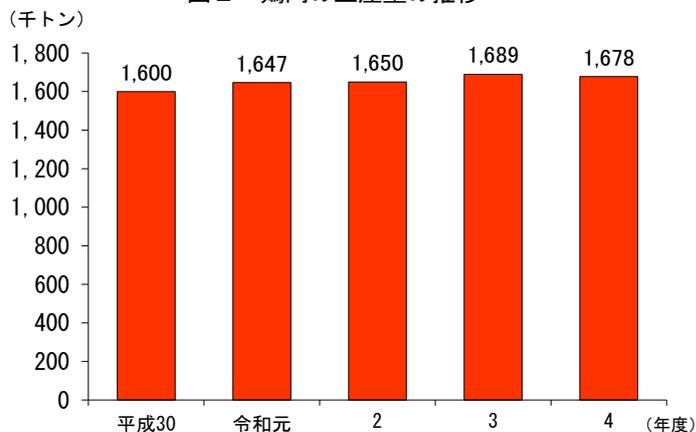
資料：農林水産省「畜産統計」
注1：各年2月1日現在。
注2：令和2年は農林業センサス実施年のため、データなし。

◆生産

4年度の鶏肉生産量、前年度比0.7%減

鶏肉の生産量は、消費者の根強い国産志向や健康志向などを背景に、平成23年度以降、前年度を上回って推移していたが、令和4年度は、12年ぶりに167万7673トン（前年度比0.7%減）と前年度をわずかに下回った（図2）。なお、平成30年度以降は160万トンを超えて推移している。

図2 鶏肉の生産量の推移



資料：農林水産省「食鳥流通統計」、「食料需給表」より農畜産業振興機構推計
注：骨付き肉ベース。

◆ 輸 入

4年度の輸入量、鶏肉は前年度比4.9%減、鶏肉調製品は同0.8%増

鶏肉

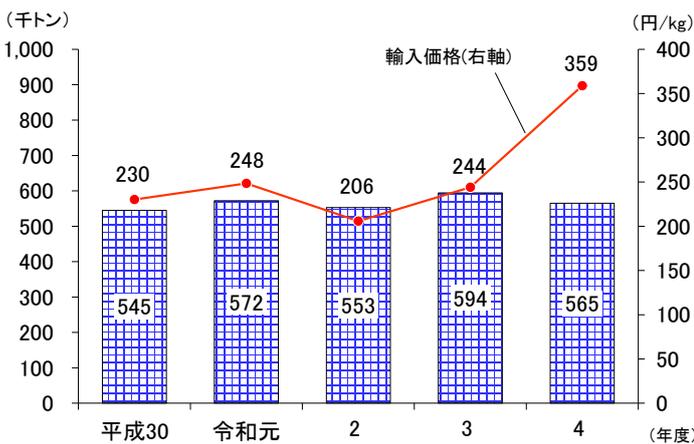
鶏肉の冷蔵品は消費期限が短いことから、輸入品のほとんどは主に加工・業務用に仕向けられる冷凍品である。

鶏肉の輸入量は、国内消費量の約25%を占めており、近年は50万トン台で推移している。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により業務用需要が減少する中、国内の輸入品在庫が高水準にあったことなどにより輸入量の減少が見られたが、3年度は、テイクアウトやデリバリー利用などによる中食需要の増加を受けて、輸入量は過去最高を更新した（図3）。

4年度は前年度のブラジルからの輸入量が多かったことや、米国での高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）発生の影響で同国からの輸入量が減少したことから、56万5043トン（前年度比4.9%減）と前年度をやや下回った。

輸入価格（CIF）は、1キログラム当たり359円（同47.0%高）と前年度を大幅に上回った。

図3 鶏肉の輸入量および輸入価格（CIF）の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：実量ベース。

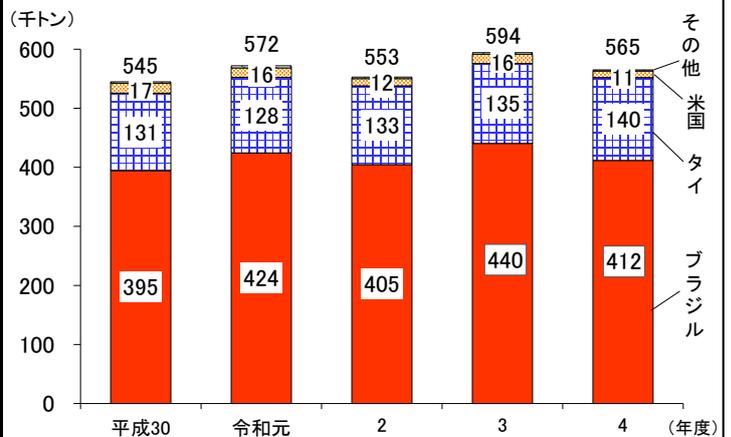
主要な輸入先のうち、ブラジルが全体の約7割を占め、タイ、米国が続いている。

国別の輸入量を見ると、ブラジル産については、4年度は、41万1641トン（同6.5%減）と前年度をかなりの程度下回った（図4）。

タイ産については、平成25年度の輸入再開以降、細かい規格への対応が可能であることなどから一定数量のニーズを得て推移している。4年度は、14万413トン（同3.8%増）と前年度をやや上回り、3年度連続の増加となった。

米国産については、クリスマス需要などに向けられる骨付きもも肉が多くを占めており、4年度は、1万994トン（同30.9%減）と前年度を大幅に下回った。

図4 鶏肉の国別輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：実量ベース。

鶏肉調製品

鶏肉調製品（加熱処理や衣付け、調味した鶏肉など）の輸入量は、近年、外食・中食需要の高まりや消費者の簡便志向などを背景に増加傾向で推移している。

主な輸入先は、加熱処理施設が多数存在するタイおよび中国となっており、両国からの輸入量の合計で全体の99%を占める。

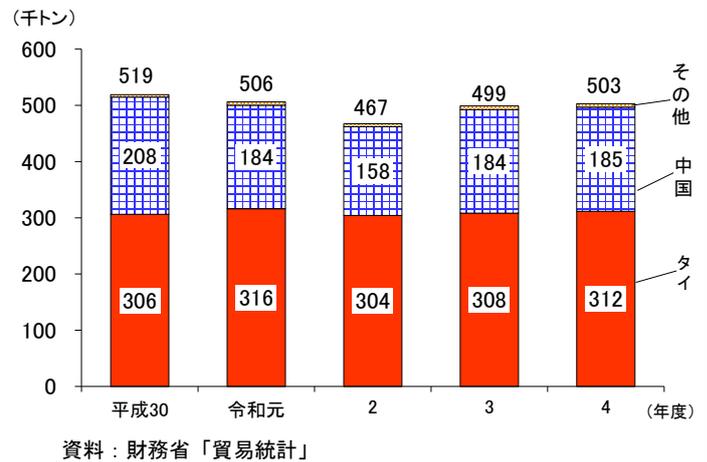
令和2年度にCOVID-19の影響により業務用需要が減少したことから、同年度の鶏肉調製品の輸入量はタイ産、中国産ともに前年度を下回ったものの、3年度は中食需要の増加により、いずれも増加した（図5）。4年度は上半期の輸入量が前年度より増加したことなどから、50万2941トン（前年度比0.8%増）と前年度をわずかに上回った。

国別の輸入量は、タイについては、平成30年度以降、30万トンを超える輸入が続いており、令和4年度は、31万1671トン（同1.1%増）と前年度をわずかに

上回った。なお、全輸入量に占める割合は62%となった。

中国については、4年度は、18万5012トン（同0.5%増）と前年度をわずかに上回った。なお、全輸入量に占める割合は37%となった。

図5 鶏肉調製品の国別輸入量の推移



◆消費

4年度の推定出回り量は前年度比1.9%減、家計消費量は同1.8%減

鶏肉の推定出回り量は、近年、消費者の低価格志向や健康志向などを背景におおむね増加傾向で推移している。

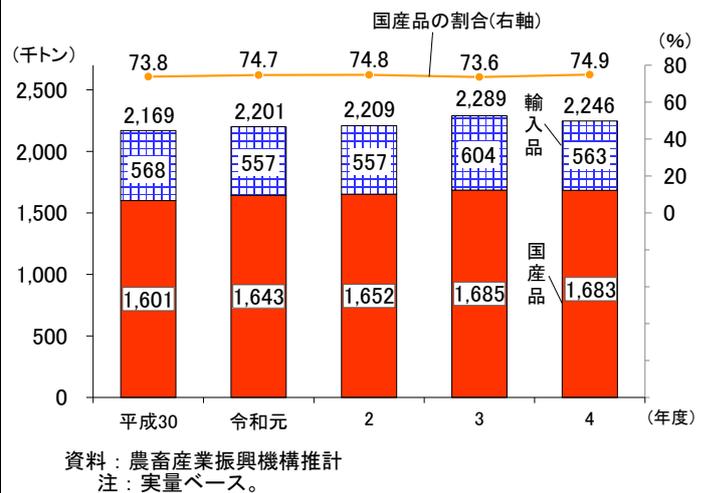
令和4年度は、中食需要が堅調で224万6467トンとなったが、前年度は巣ごもり需要や輸入品の出回り量が多かったことなどにより、前年度比では1.9%減と前年度をわずかに下回った（図6）。

出回り量の内訳を見ると、鶏肉消費量全体の約4分の3を占める国産品は、堅調な需要が継続したことで、4年度は、168万3117トン（前年度比0.1%減）と前年度並みとなった。

主に加工・業務用に利用されている輸入品は、価格が高値であったことなどにより、4年度は、56万3350トン（同6.7%減）と一昨年度までの出回り量は上回ったものの、前年度をかなりの程度下回った。

なお、合計に占める国産品の割合は74.9%と前年度から1.3ポイント増加した。

図6 鶏肉の推定出回り量の推移



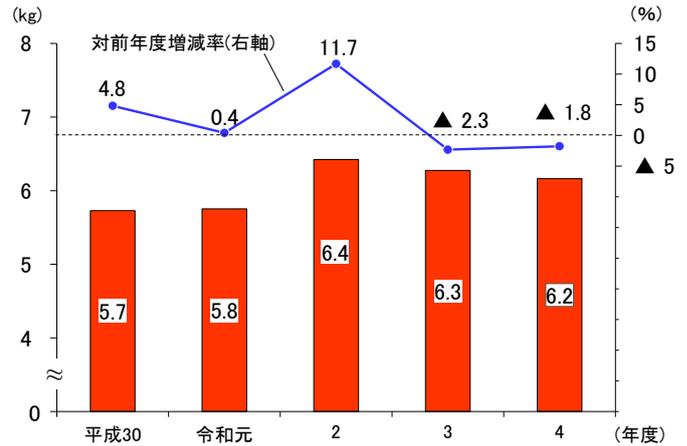
家計消費

鶏肉消費量の約4割を占める家計消費量は、消費者の健康志向の高まりに加え、食肉の中での価格優位性を背景に、長期的には増加傾向で推移している。

令和2年2月下旬以降、COVID-19の影響による巣ごもり需要が増加する中、食肉の中でも比較的安価な鶏肉の購入数量が増加し、令和2年度に過去最高を更新した。

3年度および4年度は、外食需要の回復に伴い、2年度と比べると巣ごもり需要に落ち着きが見られたものの引き続き高い水準となっている。4年度は年間1人当たり6.2キログラム（前年度比1.8%減）と前年度をわずかに下回った（図7）。

図7 鶏肉の家計消費量（年間1人当たり）の推移



資料：総務省「家計調査報告」

在庫

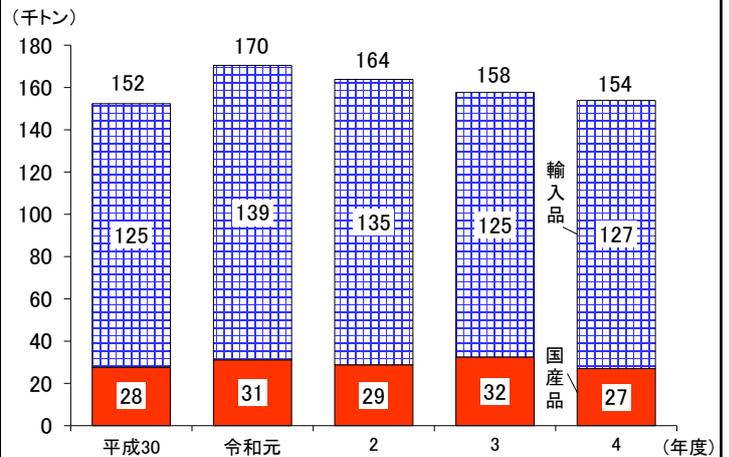
4年度の推定期末在庫量、前年度比2.4%減

鶏肉の推定期末在庫量は、その約8割を輸入品が占めることから、輸入量の動向に大きく左右される。

令和4年度は、国産鶏肉生産量が減少したことや輸入鶏肉の高騰から国産鶏肉の引き合いが増えたことなどから、15万3902トン（前年度比2.4%減）となり、3年度連続で前年度を下回った（図8）。

このうち、輸入品は12万6853トン（同1.4%増）と前年度をわずかに上回った一方、国産品は2万7049トン（同16.8%減）と前年度を大幅に下回った。

図8 鶏肉の推定期末在庫量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

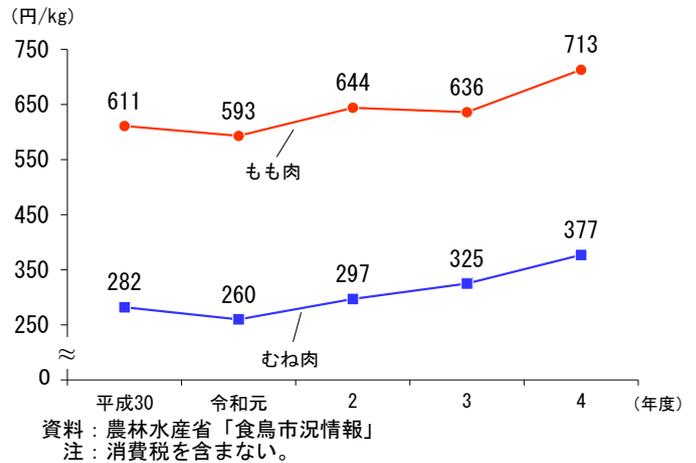
◆卸売価格

4年度の卸売価格、もも肉は前年度比12.1%高、むね肉は同16.0%高

国産鶏肉の卸売価格（プロイラー卸売価格・東京）は、日本では「もも肉」に対する消費者の嗜好が高いことから、価格水準が「むね肉」に比べて高くなっている。「もも肉」は、主にテーブルミートに仕向けられており、「むね肉」は総菜やチキンナゲット、ソーセージなど主に加工・業務用利用が多くなっている。

「もも肉」は、4年度は安定的な需要が継続していることや、飼料価格の上昇から、卸売価格は1キログラム当たり713円（前年度比12.1%高）と前年度をかなり大きく上回った（図9）。「むね肉」は、価格が高水準となっていた輸入鶏肉の代替需要の増加や、飼料価格の上昇により、同377円（同16.0%高）と前年度を大幅に上回った。

図9 国産鶏肉の卸売価格（東京）の推移



◆小売価格

4年度の小売価格（もも肉）、前年度比5.4%高

鶏肉の小売価格（もも肉・東京）は、近年、100グラム当たり130円前後で推移している。

平成30年度以降、前年度を下回る推移が続いていたが、令和3年度は4年ぶりに前年度を上回った。4年度は、同137円（前年度比5.4%高）と前年度をやや上回り、過去最高となった（図10）。

図10 鶏肉の小売価格（もも肉・東京）の推移

